

教員養成課程学生に対する SDGs 教育の実践

梶 崎 久美子*

(2020年12月1日 受理)

Practice of Education for SDGs For Students in the Teacher Training Course

Kumiko NARAZAKI*

Keywords: SDGs 持続可能な開発目標, ESD 持続可能な開発のための教育, students in the Teacher Training Course 教員養成課程学生

1. はじめに

本報告は2019年度に広島女学院大学で行った教員養成課程の学生を対象としたSDGs教育の実践に関するものである。

筆者は2007年に広島女学院大学に奉職してから、家庭科教員養成課程の委員として、学生と関わり、学生の学びをサポートしてきた。2017年ごろに持続可能な開発のための教育(ESD)について知ることとなり、自身の研究活動にもその視点を取り入れるようになった。ESDや持続可能な開発目標(SDGs)についてさらに知るうちに、その内容が家庭科教育と深く関わると感じ、実践的な学びの場を提供したいと考え^{注1)}、2019年に2つのSDGs教育についての実践を企画し実践した。多くの方の協力を得ながら行ったこの2つの実践について報告し、教員養成課程の学生へのSDGsに関する教育を今後どのように進めていくべきかをまとめたいと思う。

2. ESD ティーチャープログラム

ESD ティーチャープログラムは2019年8月27, 28日に本学において開催した企画である。このプログラムは近畿ESDコンソーシアム^{注2)}が主催する全国の教員を対象としたプログラムとして2018年から行われているものである。近畿ESDコンソーシアムでは、このプログラムを通して、教員としての基盤になる力量に加えて、豊かな教養のもと、地域を教材化する視点を持ち、児童・生徒の主体的な学びを引き出すとともに、自らも持続可能な

社会を担う一員として、ESDを実践していく力量を備えた教員になることを目指している。基本的には教員向けのプログラムであったが、主催者にお願ひし、本学の開催にあたっては教員養成課程学生の参加も認めていただくこととなった。開催が決まってから、本学学内及び広島県内の中学・高校などに開催要項の郵送やチラシの配布による広報を行い、参加者の募集を行った。

当日の参加者は本学の家庭科、国語、英語の教員養成課程学生10名と現職の小学校教員1名^{注3)}であった。

当日のプログラムは次の通りである。1日目前半は広島大学の吉田和浩先生から「SDGsの理論」と題し、ご講演、また、質疑応答をしていただいた(図1)。後半は奈良教育大学の中澤静男先生から「ESDで育みたい資質能力」と題し、ご講演、また質疑応答をしていただいた



図1 吉田先生の講義の様子(2019年8月27日著者撮影)

* 広島女学院大学人間生活学部生活デザイン学科准教授



図2 中澤先生の講義の様子(図1と同じ)



図4 本学学生の発表の様子(図3と同じ)



図3 植西先生の講義の様子(2019年8月28日著者撮影)



図5 河野先生の講義の様子(図3と同じ)

(図2). 2日目は「ESDの授業づくり」と題し、実践発表が行われた。このプログラムは開催される地域によって内容が異なるもので、本学での開催にあたっては本学日本文化学科の植西浩一先生から、本学に赴任する前に携わっておられたESDについてのご経験をお話いただいた(図3)り、2017年度から国際教養学科及び日本文化学科で行われている安芸太田町との取り組み「安芸太田町花田植」に参加した学生から学びの発表があったりした(図4)。なお、筆者も実践者ということで講師として「ESDの授業づくり～家庭科を例に～」と題し、講義を行った。2日目後半は「実践事例検討」と題し、奈良教育大学附属小学校の河野晋也先生による実際の授業づくりについての検討を全員で行った(図5)。小学校社会科の授業を例にESDを行っていくためにはどうしたらいいか、どのような授業展開があるかなどグループワークを通して考えていった(図6)。

すべての内容について常に振り返りを行い、参加者がそれぞれ感想を交流する場面が多く設けられていた。



図6 参加学生の検討の様子(図3と同じ)

この企画の参加者のほとんどがESDやSDGsについて詳しく知っているとは言えない状況の中だったが、この2日間のプログラムを通じて、教員となった時だけでなく、今後の生活を考えていくうえで必要な視点を獲得できたと考えられる。

最後に感想を書いてもらい、多くの参加者から良い反応は得られたが、この実践を通して、もっとはっきりと参加者に効果があるのどうかを検証する必要があると感じ、続いての実践を計画した。

3. SDGs 特別勉強会

この企画は2020年2月8日に行った。崇徳中学・高等学校の花野木政信先生をファシリテーターとしてお迎えし、一般社団法人イマココラボが作成したカードゲーム「2030SDGs」を使用して、SDGsについて知るという内容である。前回の企画ではSDGsについてほとんど基礎知識がなく、国際社会において多くの国々が取り組んでいる事でありながら日本ではまだ浸透しておらず、学生たちにとっても「専門用語や状況をとにかく知ること」で精いっぱいだった」という感想があったことから、SDGsを自分事として知るためには体験的な企画がよいと考え、内容を検討した結果、「2030SDGs」の公認ファシリテーターである花野木先生と偶然ご縁がつながり、実施に至ったものである。

内容としては12時30分から開始し、15時15分までの約3時間で、2～3名のグループに分かれ、「2030SDGs」を体験してもらった(図7)。ゲームの内容について、詳しくは書かない^{注4)}が、個人で競い合うのではなく、学科や学年をできるだけバラバラにしたグループを作り、参加させることで、SDGsについて知ることだけでなく、コミュニケーション能力の育成や、多様な視点の獲得も狙った。ゲーム中盤や振り返りでは花野木先生による解説が行われ、自分たちの行動がゲームの世界の中でどのように影響を与えたか、またこれらが世界の縮図であることなどをお話しされた(図8)。それらを踏まえ、勉強会の最後には各自で振り返りを行い、その後学科、学年を超えた意見交流の時間を設け、会を終了した。

参加者は家庭科教職課程4年3名、3年4名、2年3名、1年3名、国語科教職課程3年6名、英語科教職課程3年1名の計20名であった。

この実践では参加予定者40名に事前アンケート^{注5)}を取り、24名が回答し、うち有効回答率は96%であった。

まず、勉強会に参加する前、「SDGs」という言葉を知っている、ということについては、70%があると答えた。2019年8月の勉強会に参加した学生もいるため、数字としてはやや高めの結果が出たと言える。次に、「SDGsという言葉について説明できるか」と尋ねたところ、しっかりできるが0%、ある程度できるが17.4%、あまり自信がないが52.2%、全く自信がないが30.4%であった。認知はしているが、自分自身の言葉で説明する



図7 2030SDGsを体験する学生の様子(2020年2月8日 著者撮影)



図8 花野木先生による解説の様子(図7と同じ)

には難しいようである。次に現段階でわかる範囲でSDGsという言葉の説明するよう指示したところ、15名(全体の62.5%)の学生が回答してくれた。記述された内容をワードクラウドという形でテキスト分析したところ、図9のようになった^{注6)}。文字数は任意で、キーワードでもよいとしたことから国連が定め、社会や世界で目指されている、持続可能な開発目標の略称であることがある程度認識されていることが分かる。説明文章の平均文字数を出したところ約27文字であり、端的に述べている印象がある。また、この勉強会への参加の動機を選択肢から選んでもらったところ、図10のような結果となった。誘われて参加した学生が2割程度いるが、基本的にある程度の自発的な参加の動機があったと考えられる。その他にも自己肯定感や他者理解に関する質問について選択肢から選んでもらったり、地域社会や国際社会に貢献するために必要なものを自由に記述してもらったりしたが、紙面の都合で今回は省略する。

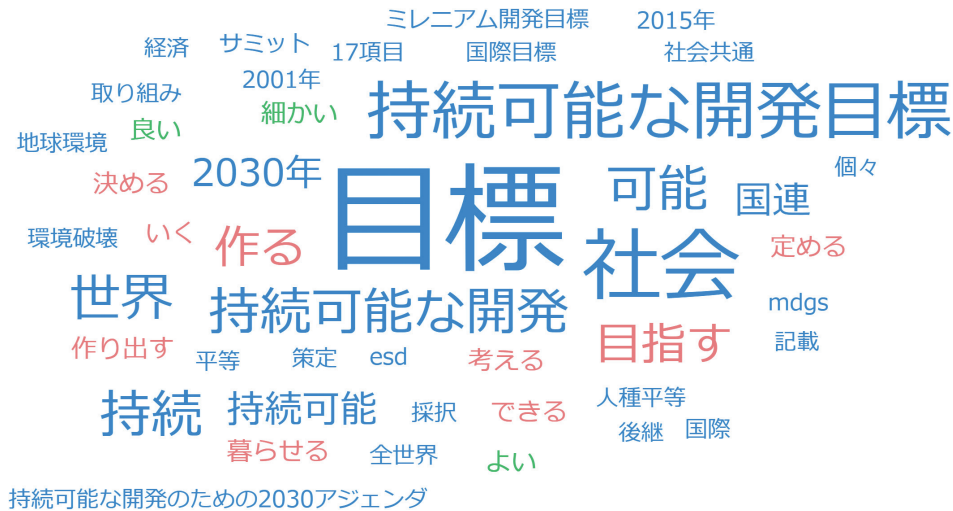


図9 事前のSDGsの説明のワードクラウド（事前アンケートより注6を用いて著者作成）

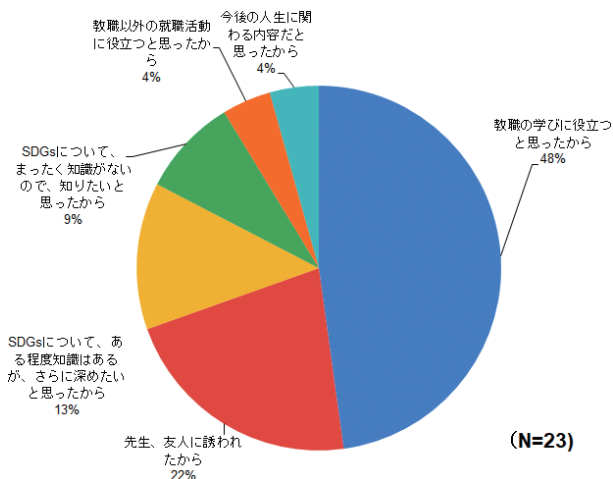


図10 勉強会への参加動機（事前アンケートより著者作成）

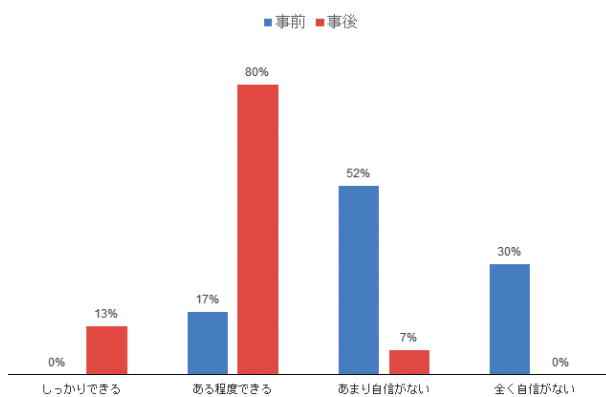


図11 SDGs説明の自信の有無の比較（図10と同じ）

事後アンケート^{注7)}は14名が回答し、有効回答率は100%であった。まず勉強会に参加したことでSDGsについての理解が深まったかを確認した。結果は「まああてはまる」が40%、「とてもあてはまる」が60%となった。ほとんどの学生は理解が深まったことを自覚している。

また、事前アンケートでも尋ねたSDGsについて説明できるかどうかを問うたところ以下の結果となった（図11）。事前と比較すると自信がついた学生が著しく増加している。実際にどのように説明するかを指示し、記述した内容をワードクラウドという形でテキスト分析したところ、図12のようになった。SDGsがどのように達成されるべきか、具体的な動詞の出現が特筆すべきことであり、単なる用語の説明ではなく、多様な問題を含み、協力しながら進めていくものであることだと認識している様子がうかがえる。事前と回答者数は1名減ったが、文字数としては約63字と2倍以上増え、丁寧に説明が書けている様子から、事後アンケートを答えた学生の成長ぶりがうかがえる。その他カードゲームの感想、ゲーム、解説、個人の振り返りを含めての感想、花野木先生へのメッセージ、感想交流会を含めた勉強会全体の感想などを聞いた。こちらも誌面の都合上全て説明することは難しいが、それらの記述を共起ネットワークという形でテキスト分析した結果が図13である。SDGsについて「考える」「学ぶ」機会として捉えられ、また「カードゲーム」が「自分たち」にとって「協力」について「気づく」機会となり、「目標」を「達成」することともつながっているように受け取れる。花野木先生による「わかりやすい」「解説」によって「楽しい」という気持ちで「理解」した様子も見受けられ、「体験」や「実践」を通して「社会」に「意識」を向け「生活」を「変える」きっかけにもなったのではないかと考えられる。「行動」と「できる」に関連が見られることもこの実践が教員養成課程の学生の今後を良い方向へ示唆する印象を与えている。こういった「勉強会」は「眠たい」ことが多いが「今回は「学び」が深まったというコメントも筆者として嬉し

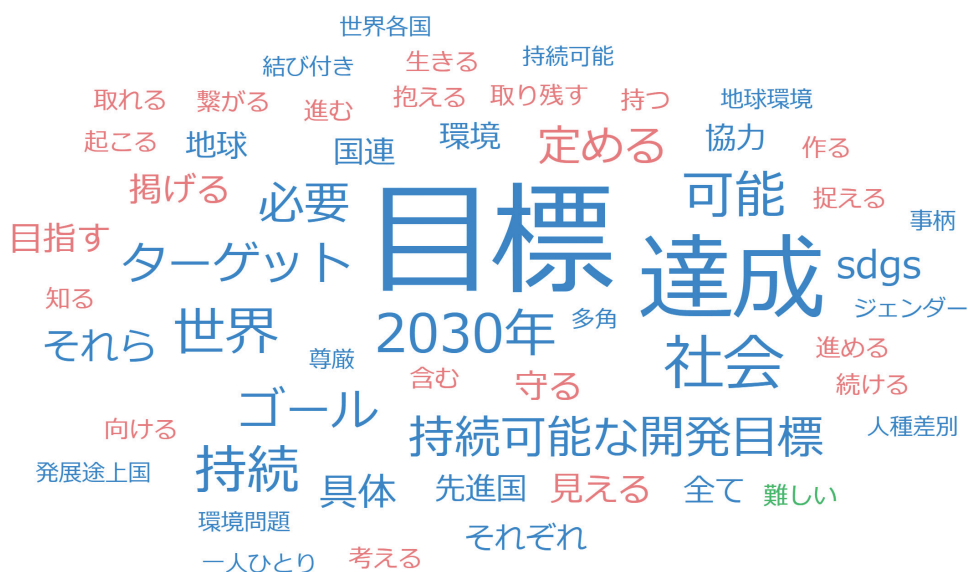


図12 事後のSDGsの説明のワードクラウド（事後アンケートより注6を用いて著者作成）

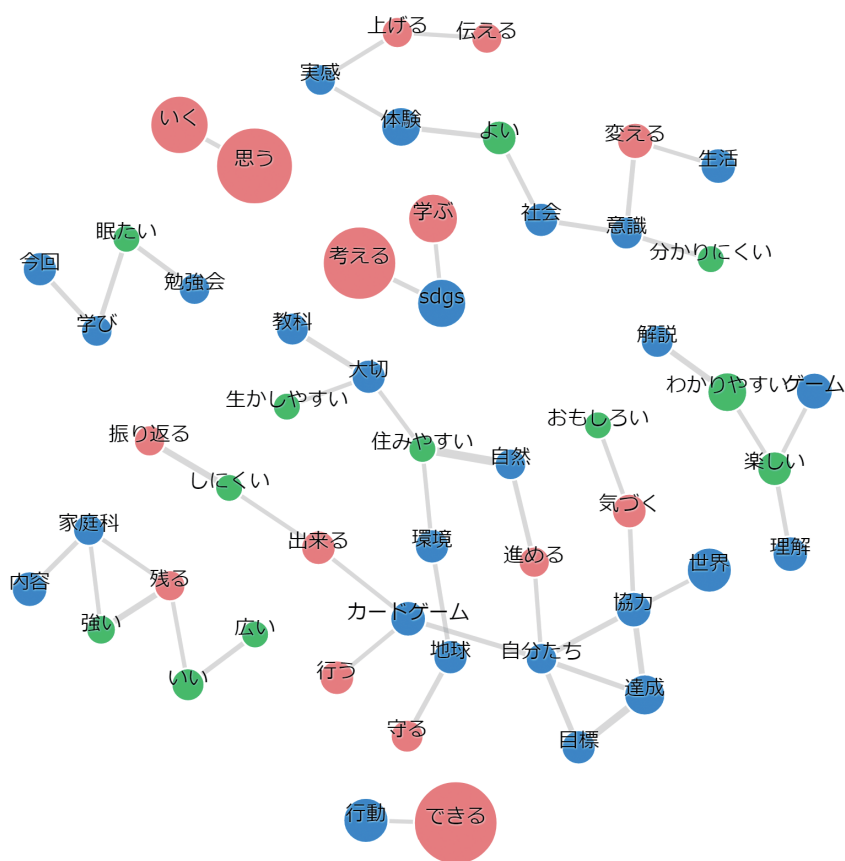


図13 事後の自由記述全部をまとめた共起ネットワーク（図12と同じ）

い感想であった。

4. まとめ

本論では、2019年度に教職課程学生を対象に行った2つのSDGsに関する勉強会の実践についてまとめた。学生がSDGsを自分事ととらえる姿勢の育成、同時に、教

員になったときの授業に取り込もうとする姿勢を育成することを目的に進めた。前半の目的においては、外部の先生からの講義や聞いた後に自分の考えを交流すること、また疑似的な体験を通して世界の問題に触れることでかなり達成できたと考える。しかし、後半の教員養成課程の学生ならではの授業に取り込もうとする視点につ

いてはまだ育成できたとは言えず、別のアプローチが必要であると感じた。よって、今後も引き続き教職課程学生に対し、SDGsを絡めた様々な勉強会を企画し、新学習指導要領の前文と総則にもある、「持続可能な社会の創り手」を育成するための教育に寄与できる教員の育成に貢献したいと思う。

最後に、これらの実践にあたって、企画に参加してくださった講師の皆様本当に快くご協力をいただいた。また、日本文化学科植西浩一先生にも多大なご協力をいただいた。この場を借りて皆様に厚く御礼申し上げます。また、これらの実践は本学キャンパスレポーター西岡聖奈さんにより取材され、学生たちの参加や当日の検討のモチベーションをあげることに寄与くださった。終了後も、中国新聞に記事が掲載されることで、ふり返りにも役立った。取材くださった西岡さんにも合わせて御礼申し上げます。

注

1) 正課の授業でも取り上げられているが、著者自身が教員

養成課程教職専門科目を担当していないため、課外での取り組みとなった。これまで家庭科教職課程勉強会として学生主導の課外の活動をサポートしている関係で、学生からの要望もあり企画するに至った。

- 2) 奈良教育大学が中心となり、近畿地方におけるESD推進の拠点づくりやESDを実践できる教員養成のプログラムを提供している。また、ESDの実践や社会人向けESDの推進も行っている。
- 3) 尾道市の公立小学校の教員であった。ご校務の都合で1日目のみの参加であったことが残念であった。
- 4) カードゲームの詳細については、イマココラボのHPを参照されたい。<https://imacocollabo.or.jp/games/2030sdgs/>
- 5) 参加希望者には2020年1月26日～2月7日までの期限としてグーグルフォームで解答するようメールで連絡した。
- 6) テキスト分析については「ユーザーローカル テキストマイニングツール」(<https://textmining.userlocal.jp/>)を使用した。以下のテキスト分析の結果についても同様である。
- 7) 勉強会終了後、メールにてグーグルフォームのアドレスを連絡し、2020年2月8日から17日の期間で解答するよう指示した。